



3

2

1

* 同じ内容ならば 完答	(2)	(1)	(6)	(5)	(4)	(1)	(4)	(3)	(2)	(1)
	二	紀貫之	ざ	潮	送	イ	イ	*	は	口
	へ	仮名序	れ	海	* 別	(2)	(2)	あ	つ	(1)
	ト	平安時代	あ	の	の	(3)	(3)	へ	か	(2)
	イ	高知県	へ	ほ	宴	(3)	(3)	り	あ	(1)
ハ	古今和歌集	り	と	(3)	(3)	(3)	。あ	(2)	(1)	
口			り	り	(3)	(3)	。あ	(2)	(1)	
ホ			。あ	に	(3)	(3)	。あ	(2)	(1)	
			。あ	て	(3)	(3)	。あ	(2)	(1)	
			。あ	、	(3)	(3)	。あ	(2)	(1)	
			。あ	あ	(3)	(3)	。あ	(2)	(1)	

「解説」

1

(1) 伝聞の意味で用いられている助動詞を選ぶ。

イ 「火の用心」と言いながら、管理人の部屋の方に去って行くようだ。

ロ 聞くところによると、侍従の大納言のお姫様がお亡くなりになったと言ったことだ。

ハ そうは言っても、住む人があるからなのだろう。

ニ 成長した時の様子が想像されて、かわいらしい顔立ちである。

(4) ののしる＝声高く言い騒ぐ。大騒ぎする。

《通釈》

男の書くものであると聞いている日記というものを、女である私も試みてみようと思つてこうして書くのである。ある年の十二月の二十一日の午後八時ごろに旅立つ。その様子を、わずかばかり書きつけておく。

ある人が、地方官勤務の四年五年(の任期)が終わって、おきまりの離任に際する事務の引継ぎなどのことを全部済ませて、離任証明の書類などを受け取ってから(今まで)住んでいた官舎から出て、船に乗るはずの場所へ移る。あの人やこの人、知ってる人や知らない人(など)いろいろいる人たちが、見送りをする。(中でも)任国での数年間、親しく付き合ってきた人々は、特に別れることをつらく思つて、一日中あれこれと私の世話を(して)、大騒ぎするうちに夜がふけてしまった。

2

(5) 送別に来た人の中には真実別れを惜しんでいる人もいて、こういう人には、貫之の筆はとて温かくなる。自分の人柄のよさを暗示するところは抜けない。

(6) 淡水のみずうみではなくて、塩水の海のほとりなのであるから、塩分は十分にある。したがって、その塩のために魚はあざれない(＝くらさない)はずであるのに、ここでは奇妙なことにみんなあざれ(＝乱れ騒ぎ)合っている。の意。あざれないはずなのにあざれあつている」といふ。ことはの上での矛盾のおかしみをならつていいる。

《通釈》

二十一日に(ど)うか(和泉の国まで)無事に行き着きますように(と)、心静かに神仏に願掛けをする。藤原のときさねが(この旅は馬は使わない)船の旅であるけれど、馬のはなむけ(＝送別の宴)をしてくれる。身分の高い者から低い者も皆、すっかり酔っ払つて、たいそう見苦しく、(物など腐ることのないはずの)塩水のそばなのに不思議なことに腐っているように(海のそばで、)ふざけあつていいる。

二十三日。八木のやすのりという人がやつてくる。この人は、国司の役所でそれほど親しく召使つていいるような深い縁故の(者でもない)よなのだ。(それなのに)この人は、お(そ)かなさまで、送別の宴をしてくれた。国司の人柄によるのであるうか、土着の人の人情の常としては、(国司が離任して帰京してしまつたからには)もう顔出しをする必要もない(と思つて)見送りに来ないようなものであるのに、(この)やすのりのように(真心のある人は)他人のおもわくなどを(気にかけないで)やつて来たのである。これは、よい饗別の品をもらつたからそれでほめるといふわけではない。

二十四日。国分寺の住職が、送別の宴をしいにおいでくださった。そこに居合わせた人々は皆身分の上下を問わず、子供までが正体もなく酔っ払つて、手で書くことになると(一の字さえも書けないような)無字の(者が、足では十の字を踏んで)千鳥足で(遊んで)い